

創世記3章8節—21節

コリントの信徒への手紙二4章13節—18節

マルコによる福音書3章20節—35節

教会の梅の果の収穫がほぼ終わりました。わたしよりも一回り二回りも先輩の方々が梅の木に登られて、隅々まで収穫してくださいました（まだ若干冷蔵庫に在庫があります）。毎年なさっていることと思いますが、くれぐれもご無理のないようにと願います。それでも、隠れていた実があったのでしょうか。ポトっと大きな音を立てて、黄色く熟した実が落ちてきます。あんずのような桃のような大変良い香りがしています。赤い小さい実の梅も収穫が終わりました。

さて、アダムとエバ（エデンの園を追放される前は「女」）が食べた実は、梅ではないと思いますが、本日の旧約日課は、「創世記」のその個所です。このお話の結末は、あえて書く必要もないほど有名です。それゆえこのお話には、ユダヤ教においても、教会においても、たくさんの解釈があります。ただし、教会とユダヤ教では、観点が大きく異なるところがあります。教会は、このお話に、罪の起源、すなわち原罪を見出します。しかし、ユダヤ教はそのような理解をせず、原罪という概念もありません。この点が、大きな相違点です。しかし、共通している点もあります。それは、主なる神様は、初めに造られたものは、すべて「よい」ものであったということです。

この「よい」とされた造られたものの中の人間に注目しますと、天地創造の初めには、人間に命の限界、すなわち死はありませんでした。それは食べることに及んでおり、エデンの園の中では、何かの命を奪うような形態の食事はありませんでした。それが木の果実を食べるといった形態でした。そのようなすべてが「よい」とされた環境、それが最初にあった。これも教会とユダヤ教の間で共通しています。もし天国とはどのようなところかと想像するならば、このエデンの園が、もっとも分かりやすいイメージだと思います。あるいは、本当の平和とは何かを考えた時と同じです。

創世記のこのお話は、明らかに何らかの事象の目撃証言による記述ではありません。主なる神様は、絶対に正しい方であり、全能であるに、なぜ人間は不完全であるのか、また、この世界はなぜ混乱しているのか、また人間を含めて生き物になぜ死があるのか、そのような問いに対して、説明しようと書かれたのだと思います。そうしますと、アダムとエバの何がいけなかったのか、そのことが重要になります。そのことを少し考えたいと思います。

アダムとエバの何がいけなかったのか、このことについて、このお話は果実を食べたことだけではなく、いくつかの間違う段階を設けていると思います。その段階とは、その途中でもし、主なる神様の意図に即した対応があれば、エデンの園を追放される結果にはならなかったであろうということです。

最初の間違いは果実を食べたことですが、それ以外に考えますと、最初は主なる神様が登場した時に起きています。「その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると」(創3:8-9)。原文では、「彼らは聞いた」が最初にあります。明確に、主なる神様の足音を聞いて、隠れたのです。これが最初の間違いでした。次は、「主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」と問われた時です。「どこにいるのか」の原文の直訳は、「あなたはどこか？(存在動詞は省略)」です。率直にアダムの居場所を聞いています。しかし、その呼びかけに対して、「彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから」、次は、その呼びかけに、ここですと堂々と答えないことです。細かい情景描写はありませんが、正面に立っていないことは確かでしょう。

突然に、飼い犬の話になって恐縮ですが、牧師館の二階で犬を飼っております。おかげさまで、その犬が、すっかり新しい牧師館に慣れまして、留守中にいろいろとやらかすことがあります。いつもは戻ると、階段の上から下の玄関を見て(階段は怖くて降りられないので)、お出迎えをしてくれるのですが、だいたい、何かをやらかしたときは、お出迎えに出ません。呼びかけても出てきません。しかし、時折、何かをやらかしたにもかかわらず、元気に迎えてくるときもあり、呼びかけるとすぐに出てくるときもあります。そのようなときは、後からやらかしたこと見て、驚くことになるのですが、帰宅を喜ぶ姿を見せてお出迎えをされると、怒るに怒れなくなります。アダムもそうすればよかったというわけではありませんが、主なる神様の前に隠れずに、その呼びかけに、素直に答えれば、話は変わったのかもしれない。見方を変えれば、主なる神様は、禁じられた木から果実を食べて、たとえ自分が裸だと気づき、それゆえ恥ずかしいなど、いろいろなことを考えてしまったとしても、主なる神様を信頼して、呼びかけに素直に答えることを求めているといえます。

次の間違いは、責任転嫁です。アダムは、主なる神様から「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか」と問われた時に、「はい」か「いいえ」で答えませんでした。「あなたがわたしと共にいるようにして下さった女が、木から取って与えたので、食べました」と答えます。このアダムの答えは、この失敗の責任は、わたしにではなく、女にあり、間接的には主なる神様にあると語っています。ここでも素直に謝れば話は変わったかもしれない。

次に、主なる神様は、女に問うと、女も「蛇がだましたので、食べてしまいました」と蛇に責任転嫁をします。アダムと同じように、わたしに責任はなく、蛇にある、間接的にはそれを造られた主なる神様に責任があるとするのです。ここでも、女がアダムをかばうわけではないとしても、自分の責任をしっかりと認識していれば、お話は変わったかもしれません。

最後の蛇は、一方的に主なる神様から叱られます。蛇の反応はありません。し

かし、それは蛇の賢さを示しています。もし、蛇が責任転嫁しようとする、その対象は、主なる神様しかいないからです。しかし、最初に作られた世界は、すべて「よい」世界ですから、主なる神様の責任ではありません。最終的に、蛇が全責任を負い、呪われる存在となりますが、蛇は、世界が「良い」ものであったことを示したともいえます。

原罪とは責任転嫁のことであるとするのは、単純化しすぎるかもしれません。しかし、このお話は、最終的にアダムとエバの物語が、自分を守ろうとして行った責任転嫁、それが大きな悪、禍を生み出す、そのことを重要な教訓の一つとして語っていると思います。それゆえ、今の世界が、主なる神様が最初にお造りになった「よい」とされた世界ではないのは、造られたものの代表である人間が、常に責任転嫁をして歩んでいることも、重要な要因の一つと考えられるのです。

それでは、このような責任転嫁をしてしまう人間の状態を、どうやって修正するのでしょうか。それは、このお話の最初の段階にある、間違いを犯したとしても、主なる神様に立ち返り、その呼びかけに応えることです。

ユダヤ教におけるその方法は、人間が罪を犯す存在であるという前提にたち、犯してしまった罪を悔い改め、主なる神様に立ち返る気持ちをしっかりと持ち、罪の許しのための具体的な手段を示す（神殿）祭儀を行い、罪を犯さないように生きる道標としての律法を守ることです。『聖書』はそのように促しています。しかし、ユダヤ社会においては、律法が一般的な法としても機能するわけですが、同時に、一般法と同じようにしっかりと機能しなかったことも、『聖書』が示す通りです。

教会の信仰におけるその方法は、イエス様をキリストと信じることです。ただし、気を付けなければいけない点は、教会においても律法は有効だということです。律法は廃棄されたわけではありません。一例として今でも十戒は、教会においも大切な道標です。しかし、律法の解釈とそれを守る具体的な方法は、ユダヤ教のものとは異なります。教会としてキリスト者は、イエス様が示される愛を通してそれを行います。なぜならば、人間の罪に対する責任は、すべてイエス様が贖って下さっており、そこに誠の愛が示されているからです。そして、その愛に基づいて歩むことが、単に律法を守る以上に大切なこととなるからです。

それゆえ、その信仰の歩みによって、地上において、誰かに罪の責任を転嫁する必要もなく、誰かの責任を必要以上に追及する必要もなく、互いに許し合い、平和に暮らすことができるようになるのです。そして、地上の死が終わりではなく、天上の命の始まり、つまり最初のエデンの園における命のような、本当に命の始まりであるという希望を持つようになるのです。

しかし、教会の信仰の歩みが始まっても、世界は混乱のままであり、それが今も続いています。今の世界は、主なる神様が「よい」とされた世界とは程遠い状態です。また、この罪の許しに関わる事柄は、教会内における話です。教会がローマ帝国内にあれば、ローマ帝国内の法律が別に機能します。ユダヤ教を信じる人が、ローマ帝国内に生活している場合も同じです。そして、現代社会のわた

したちにとっても同じです。

それでは、具体的な生活において、イエス様を通して主なる神様を信じて歩むことに、どれほどの意味があるかと思えてしまいます。しかし、イエス様を信じて歩むこととは、主なる神様の呼びかけに対して、隠れずに正面から答えていることと同じです。そして、本当の希望をもって歩むことでもあります。それが具体的な生活においても大きな意味を持つと思います。

今日の使徒書にあるパウロの言葉、「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます」は、このような確信と希望を語っています。それゆえキリスト者であると同時にローマ市民でもあったパウロは、どのような困難があっても歩めたのだと思います。

本日の福音書のイエス様は、わたしたちがイエス様と同じように歩もうと努力するとき、その大きな意味がより一層深まることを示しています。本日の福音書のお話で、イエス様は、悪霊で悪霊を追放していると批判されていました。しかし、悪霊であっても仲間同士はなかよくすると答え、イエス様は、「はっきり言っておく。人の子らが犯す罪やどんな冒涇の言葉も、すべて赦される。しかし、聖霊を冒涇する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う」と語ります。この言葉は、悪霊追放と関係ないように思えますが、実はそうではありません。悪霊追放は人間の力で達成される事柄ではありません。聖霊の働きです。イエス様も、聖霊の働きによってそれを行っているのです。それでは、なぜ悪霊を追放するのか、それは苦しんでいる人を救うためにほかなりません。ここでの「人の子」という言葉は、単に人間と考えてよいのですが、イエス様はその人間について、主なる神様の呼びかけに素直に応えられないこと、責任転嫁をしてしまうこと、それらを含めて、人間が不完全であり、間違いを犯すことを十分に承知の上で、それらはすべて許されると語っています。しかし、たった一つ、今苦しんでいる人を救おうとする聖霊の働きを冒涇することは許されないと語っているのです。もしそのような聖霊の働きを冒涇し、批判してしまうと、この世界に何の希望もなくなってしまうからです。それは、逆に、どのような小さな業であれ、誰かのために行う行為は、そこに聖霊が働き、大きな業につながる、そのように語っていると思います。だからこそ、イエス様は、この後のお話で、実の家族についてではなく、「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」と語り、イエス様の歩みに従うことの大切さを語っているのです。

教会は、その始まりから現代においても、教会が存在する場所の国家や勢力と、同じ大きさや内容の業を行う集まりではありません。しかし、主なる神様の呼びかけに応じて、主イエスが示す愛に基づいて、一人ひとりが誰かのために小さな歩みをする集まりです。その歩みは、どの国家や勢力よりも大きな業につながると思います。わたしたちの教会も、世界中にあるその教会の一つです。そのことを改めて心に刻み、これからも歩みたいと思います。